

## 観光フォーラム

## 与論島における星文化とその観光活用に向けての一考察

## A study on star lore in Yoron island, Kagoshima prefecture

澤田 幸輝<sup>1</sup>、北尾 浩一<sup>2</sup>、米山 龍介<sup>3</sup>、尾久土 正己<sup>4</sup>

Koki Sawada, Koichi Kitao, Ryusuke Yoneyama, Masami Okyudo

1 和歌山大学大学院観光学研究科博士前期課程

2 大阪科学振興協会中之島科学研究所研究員・星の伝承研究室主宰

3 和歌山大学名誉教授

4 和歌山大学観光学部教授

キーワード：天文民俗学、与論島、民謡、観光と文化、アストロツーリズム

Key Words : star lore, Yoron island, folk song, tourism and culture, astro-tourism

## I. はじめに

近年、国内外において、星空をコンテンツにした観光開発の動き、いわゆるアストロツーリズムをめぐる動きが活発になっている（澤田・尾久土, 2021）。本稿で議論する鹿児島県与論島も、その一地域として把握できる。

鹿児島県の最南端に位置する与論島は、1970年代に、観光ブームに湧いた島として知られており、当時の年間来島者数は約15万人に及んでいた。他方、かかる潮流の中で、島民と観光客との間で軋轢が生じたほか、沖縄県下の観光開発の本格化、および海外旅行ブームの影響で、現在の年間来島者数は7万人弱に留まっている（神田, 2012, pp. 201-226）。また与論島では、2020年7月および11月に、COVID-19のクラスターが発生しており、同島における観光産業に大きな打撃を与えている（神田, 2021）<sup>1)</sup>。

観光と歩を共にしてきた鹿児島県与論町は、2019年9月に、和歌山大学観光学部と、同島の観光振興を企図した連携協定を結ぶ。現在、与論町と和歌山大学観光学部では、星空をコンテンツにした観光振興の取り組みや、観光映像を用いた持続可能な観光地づくりに関する共同研究を実施している（木川, 2021; 南海日日新聞, 2021年2月21日, p. 8）。

与論島で実践されている当該取り組みの1つに、星空ガイドの養成を企図した、「星空案内人資格認定講座」の実施がある（澤田・尾久土, 2020）。「星空案内人資格認定制度」とは、天文教育の普及を目的に、2007年から全国的に開始されている資格認定制度のことで（柴田ほか, 2007）、与論島では現在、2名の「星空案内人」と41名の「星空案内人（準案内人）」を輩出している（2021年8月現在）。

この「星空案内人資格認定講座」には、「星の文化に楽

しむ」という講座科目が設定されており、地域の星文化を講義内に組み込むことが許可されている（星空案内人資格認定制度運営機構, 2020, p. 15）。かかる点に鑑み、著者らは、与論島独自の星文化を当該講座に組み込むこと、および観光を通じた地域文化の継承活動をを進めることを目的に、「天文民俗学」の現地調査を行った。天文民俗学とは、現代社会から消えつつある星文化を具に記録し、それをもとに、我々の日常生活の中に星文化を再び取り戻さんとするために提唱された概念である（cf., 北尾, 2000a）。したがって本稿は、与論島で実施した天文民俗学調査の一次報告書としての側面がある。

## II. 先行研究の検討

国内における天文民俗学研究の嚆矢は、『日本星名辞典』（1973）や『日本の星』（1976）を著した野尻抱影にある。日本全国の星名を蒐集した野尻であったが、彼の著作の中に、本稿で議論する与論島の記述は見られない。同じく、星の和名を蒐集していた内田武志（1973）や桑原昭二（1963）も、その著書の内容から察するに、与論島の調査を催行していないものと思料する。『日本の星名事典』（2018）を著した北尾浩一も、与論島の記述を三上晃朗の引用（cf., 星の民俗館, 2021）に留めており、直接の調査は実施していない（北尾, 2018, p. 106）。

このように、天文民俗学を専門とする諸家の著作では、与論島における星文化の記述が見られないが、他方、島出身の研究者や郷土史家らが著した文献の中では、間接的ではあるが、同島における星名の記述がなされている。本章では、管見できた既往文献をもとに、与論島における星文化を整理

する。なお紙幅の関係上、本稿では、プレアデス星団（M45）とオリオン座三つ星（ $\delta$ 星、 $\epsilon$ 星、 $\zeta$ 星）の2つを見ていくこととする。

## 1. プレアデス星団

本節では、既往文献で見られたプレアデス星団の星名伝承を概観する。なお本節では、プレアデス星団を指していると思われる「プリブシ」のほかに、「群星」および「群り星」で表記されていた文献も挙げている。これは野尻（1973, p. 184）が、奄美大島宇検村で確認した当該星名を、「ブレシ（群れ星）」と記していることに依る。

管見した限り、与論島における当該星名の訓読には、「プリブシ」、「プリブシ」、「ムリブシ」の3種があり、それが指しているものには、「プレアデス星団」と「全天の星」の2種あることが明らかになった（表1）。本節では、とりわけ示唆に富んだ記述を取り上げる。なお、本稿の引用は原文に準じているが、文中の傍点は筆頭著者に依る。

「プリブシ」を「プレアデス星団」と同定する記述は、菊千代と高橋俊三が編纂した『与論方言辞典』においてなされている（菊・高橋, 2005, p. 510）。

プリブシ

群星。すばる星。例 ～ン ミチブシン ワーチャガ ウィテイ  
ラチェン（群星も三つ星も、私たちの上を照らしている）

奄美大島、喜界島、沖永良部島、伊江島、読谷村、渡嘉敷島など、周辺地域におけるプレアデスの方言が「プリブシ」であることに鑑みれば（北尾, 2018, pp. 46-52）、彼女らの記述は、最もオーソドックスな見解に相違ない。

しかしその中でも、川村（1984, p. 143）の記述は興味深い。彼は、「天ぬ群星や 皆が上ど照ゆる 黄金三星や 我上ど照ゆる」の民謡歌詞（→IV章参照）を、次のように解釈している。

天の群星（星座の方言名）は皆の上に照るが、黄金三星（星座の方言名、群星と隣合っている）は私の上に照る。との意であるが、星がそんな照り方をするものではなく、これは風流歌詞である。群星は一月頃の宵に、真上の空の少し南寄り（南下り）に、図1（筆頭著者改）の形に計十数個（正常の肉眼で十六個見えるので、当時の視力テスト用にもなった）の小さい星がぎっしり群がっているもの。黄金三星は、この群星の東下（南に向って左下）の方向に少し離れて図2（筆頭著者改）の形で三個ずつ計六個並んだ星のことである。群星と黄金三星は寒を背負っていると言われ、寒さと共に現れ、寒さの去る頃去る。宵の頃、十一月頃は東天に見え、一月頃は中天に在り三月頃は西に沈みかけている。冬期の夜、今日は何月何日ということ念頭にこの星を見ると、その夜の大体の時間がわかり、何月何日の何時ということこの星を見ると、夜間の方向もわかる。こうして、この二つの

星座は島民に親しまれたため、古来よく与論民謡歌詞に詠まれた。

川村は、この「群星」が、11月の夕頃に東天から現れ、1月頃に南中し、3月頃に西の空に見える、小さな星が十数個群がったもの（図1）、および、オリオン座三つ星に該当する「黄金三星（→次節参照）」に対して南に向かって右上に存する星であると、極めて具体的な記述をしている。この記述を踏まえ、川村の言う「群星」が、プレアデス星団であることは明らかである。



図1: 群星の形  
（川村, 1984, p. 143）

「群星」が「寒を背負っている」という伝承は、宇検村でも同様の聴き取りがあるほか（北尾, 2018, p. 46）、内地では、プレアデスが寒空に留まっている様子から、「スワリボシ」や「スワリジゾウ」とする地域があることが報ぜられている（野尻, 1976, p. 170）。

また「群星」が、日時や方角の目安になっていたことや、視力検査の指標になっていたという川村の記述から、これが役星であったことが読み取れる。肉眼で16個見えるという記述は、幾許か仰々しいものだが、大分県姫島村で15個（北尾, 2018, p. 26）、愛知県南知多町では20個見えた（北尾, 1991, p. 49）という報告は存する。当時の与論島の人々が、プレアデスをどこまで視認できていたかは判らないが、この星が、彼／彼女らの生活に息づいていたことは相違ないだろう。

翻って、栄（1950, p. 46）は、「<sup>ぶらぶら</sup>群星」が「我々の頭上に輝いている星の意」、すなわち全天の星であることを指摘している。そして、「天の群星や みやが上ど照ゆる 黄金道星や 吾上いど照ゆる」の民謡歌詞（→IV章参照）を、次のように解している（栄, 1964, p. 123）。

「天どう様に輝いている群星はすべての人びとを照らして下さるが、黄金、道星は私の上を照らして、道びいてくださいます」の意である。祖先をたたえ、尊ぶ歌で、天に輝く星は死んだ人びと（祖先）が昇天された、其の霊であるといわれ、また祖先の目が集まってあんなに青白く、輝いているのだという信仰があった。また群星の方は、死んだ子供等や、まだ三十三年忌の済まない人の霊であり、黄金、道星といわれる。天空に輝く星は、すっかり祖霊が神様になりきった霊であるという信仰がある。祖先を敬わなければならないという教訓の歌である。

栄は、与論島における死生観との接合性から、この歌詞が一種の教訓歌であったとしている。そして、この「群星」が、島の人々の祖霊信仰の対象であったことを指摘している。古来より与論島の人々は、死者の魂（マブイ）が、島の上から子孫を見守っているとの死生観を保持している。それは、洗骨をはじめとする葬法、および現況の自宅死率の高さにも現

表 1: 管見できたプレアデス星団の星名および対象（本節で挙げていない文献も含む）

星名\対象	プレアデス星団	全天の星	不明
ブリブシ	(栄 (1964, p. 123)) 川村 (1982, pp. 142-143) 菊・高橋 (2005, p. 510)	栄 (1950, pp. 46, 113) 栄 (1964, p. 123)	野村 (1936, p. 171) 文 (1966, p. 326) 町田 (1982, pp. 49, 103, 120) 与論町誌編集委員会 (1988, p. 1185) 日本放送協会編 (1993, p. 715) 奄美島唄保存伝承事業委員会 (2014, p. 52)
ブリブシ	-	-	山田 (1995, p. 1566)
ムリブシ	-	-	山田 (1980a, pp. 34-35, 67, 112)
不明	-	菊 (n.d., pp. 3-4) <sup>3)</sup> 菊 (1985a) <sup>4)</sup>	与論町連合青年団 (1969, p. 8)

れている（近藤，2003）。かかる与論島の死生観に鑑みると、天空で無数に煌めく星々を、死者の魂、すなわち祖先神と把握することは、極めて自然な成り行きであるものと思われる。

また栄は、「群星」を、前半では全天の星と見なす一方で、後半では「黄金道星」と同義であるとしている。このことから、「群星」が、「プレアデス星団」と「全天の星」の両方を包含したものであると推察できる。プレアデス星団を子どもや用い上げの済んでいない不安定な霊と見なし、他方、全天の星を無事に昇天した霊と解したのであれば、仄暗いプレアデスの特徴を巧みに表現していると言えるのではなからうか。栄の言う「群星」の含意を精確に汲み取れないが、星を祖霊神と見立てる指摘は、示唆に富んでいる。

ちなみに彼は、ここでの「黄金道星」を、「黄金明星」とする歌詞も載せている（栄，1950, p. 25）。

天ぬ群星や みやが上ど照らす 黄金明星や 吾上ど照らす

小川 (1981, p. 177) は、この「明星」を、沖永良部島では「ミヤブシ」と読むとして、「黄金明星」は金星であると解している。「明星」が金星であるものと仮定し、かつ栄が「黄金」を「シカニ」と読んでいることを加味すると、この「黄金明星」は、明けの明星を指しているものと理解できる<sup>2)</sup>。いずれにせよ、「群星」に対置されている星が一樣でないことから、与論島の人々は、その歌う時の情景に合わせて、柔軟に歌詞内容を変えていたのであろう。

## 2. オリオン座三つ星

本節では、既往文献で管見できたオリオン座三つ星（以下、三つ星）の星名伝承を概観する。

管見した限り、当該星名の訓読には、「クガニミチブシ」、「クガニミチブシ」、「コガネミチブシ」、「フ (ウ) ガニミチブシ」、「マイ (一) チブシ」、「ミチブシ」、「ミツブシ」、「ワガネミチブシ」の8種があり、それが指しているものに、「三つ星」、「三つ星と小三つ星 (42 番星・θ星 (オリオン大星雲が重なる) 星)」、「三角形を描く地点にある三つの大きな星」の3種あ

ることが明らかになった。また、その漢字表記も、著者によって千差万別であった（表2）。

当該星名を三つ星に同定する記述は、菊・高橋の『与論方言辞典』においてなされている（菊・高橋，2005, p. 554）。

ミチブシ

三つ星。オリオン座の中央部に直列する三つの星。ミーチブシともいう。例 ミチブシヤー ブシヌ ミーチ ナラドゥン(三つ星は星が三つ並んでいる)

沖永良部島における三つ星の方言が「ミチブシ」、読谷村では「ミーチブシ」であることに鑑みれば（北尾，2018, p. 106）、彼女らの記述は至極妥当なものである。

三上晃朗も、当該星名を、三つ星に同定した報告をしている（cf., 星の民俗館，2021）。1975年3月に現地調査を行った三上は、農家の男性から、三つ星の星名が「ミツブシ」であるとの聴き取りをしている<sup>5)</sup>。なお氏によると、調査当時、同島における星の伝承をあまり蒐集できなかったため、経年の調査は実施していないという。菊・高橋や三上のように、当該星名を三つ星に同定する見方が、最もオーソドックスであるとして良いだろう。

他方、当該星名の対象が三つ星でないという記述も管見できた。川村は、「黄金三星」に関して、次の記述をしている（川村，1984, p. 143）。

黄金三星は、この群星の東下（南に向って左下）の方向に少し離れて図2（筆頭著者改）の形で三個ずつ計六個並んだ星のことである。

彼は、「黄金三星」の特徴を、「群星（←前節参照）、すなわちプレアデス星団の南に向かって左下にある星で、図2のように、縦横に3つずつ並んだ計6個の星であるとしている。これは明らかに、三つ星とオリオン座小三つ星を組み合わせたものである。

他地域でも、三つ星と小三



図2: 黄金三星の形（川村，1984, p. 143）

星を組み合わせた星名は存するが、概して、数字の「3」を意味する語は使用されない。「ムツザ」など、三つ星と小三つ星を併せて「6」と判じた呼称や（北尾, 2020, p. 36）、「カラスキボシ」や「スゴロクボシ」など、民具を象った方言が一般的である（野尻, 1976, pp. 234, 238）。

かといって、川村の指摘が誤りであるとは断じきれない。喜界島では、三つ星と小三つ星、η星を併せて「アブラゴ（ウ）」としているとの報告がある（北尾, 1980）。近隣地域で、三つ星と小三つ星を組み合わせた星名が存していることより、伝播の過程で、その星名の対象が混淆してしまった可能性は十分にある。

山田実の指摘は、さらに興味深い。彼は、当該星名の特徴を、次のように記している（山田, 1995, p. 468）。

クガニミチブシ／フガニミチブシ

黄金三つ星。黄金のように輝く三つの尊い星。今は後者の語形という人が多い。晴れた夜間に西空を向いて空を見上げる時、頭上にて三角形をえがく地点に三つの大きな星がある。その星をさす。この星は常に人間界を照らし、しじゅう自分または人間を見守ってくださる。だから悪いことはできないとの倫理観と信仰心とがこの星に対してはいだかれている。そのような思想をいただくにいたった根底には、星は与論島民にとっては一般に、大昔から死んだ人々の両眼が天空高く飛んで行って生じたもの、その中で三つ星は人間界の近くにおいて人間を監視する、と信じられていることに因由するのであろう。

上記の記述より、山田は、当該星名を「三角形を描く地点にある三つの大きな星」と把握していることが分かる。他方で、

野尻（1973）、内田（1973）、桑原（1963）、北尾（2018）に照合した限り、かかる見方でミチブシを解したものはない。したがって著者らは、山田の記述あるいは話者の記憶違いの可能性を疑うが<sup>6)</sup>、ミチブシを三つ星以外の特定の星を意味する可能性については、現時点では否定しない。いずれにせよ、山田が、「ミチブシ」を「三角形を描く地点にある三つの大きな星」として紹介していることは、興味をそそるものがある。

なお山田は、当該星名の本来の発音は「クガニ（kugani）ミチブシ」であるが、現在では「フガニ（fugani）ミチブシ」と発音する人が多いことも指摘している。彼によると、ここでいう「クガニ」は「黄金」を意味しており、美称の修飾として用いられているという（山田, 1980b, p. 29）。また、「クガニ／フガニ」を除いた「ミチブシ／ミチブシ」も、同じ星を指しているという（山田, 1995, p. 1682）。かかる記述は、言語学者である山田独自の視点であることから、極めて示唆に富んだ記述となっている。

終りに、栄（1950, p. 46; 1964, p. 113）の記述を見ておきたい。彼は、当該星名における「ミチ」の漢字表記を、「三」ではなく、「道」の字を宛がっている。そこでは、「時間や方向を知らせて下さる星」という記述に留まっていることから、その星が何を指しているかは読み解けない。しかし、「黄金、道星は私の上を照らして、道びいてくださいます」（栄, 1964, p. 113）との記述から、「ミチ」という語が、三つを意味する「ミチ」ではなく、「導く」という意味が込められていることが理解できる。栄の解釈より、「ミチブシ」の含意の多様性が看取できるのである。

以上、本章では、既往文献で見られたプレアデス星団と三

表 2: 管見できた三つ星の星名、およびその表記と対象（本節で挙げていない文献も含む）

星名 \ 対象	三つ星	三つ星と小三つ星	三角形の星	不明
クガニミチブシ	—	—	山田（1980a, p. 34） 【黄金三つ星】	—
クガニミチブシ	—	—	山田（1995, p. 468）	与論町誌編集委員会（1988, p. 1185） 【黄金三つ星】 日本放送協会編（1993, p. 715） 【黄金三ツ星】
コガネミチブシ	—	—	—	野村（1936, p. 171）【黄金みち星】
フガニミチブシ	—	川村（1984, pp. 143） 【黄金三星】	山田（1995, p. 468）	原田（1982, pp. 103, 120） 【黄金みちぶし】
ミチブシ	菊・高橋（2005, p. 554）	—	山田（1995, p. 1682）	—
ミチブシ	菊・高橋（2005, p. 554）	—	山田（1995, p. 1682）	—
ミツブシ	三上による調査	—	—	—
ヲガネミチブシ	—	—	—	栄（1950, p. 46）【黄金道星】
不明	—	—	—	栄（1964, p. 113）【黄金道星】 与論町連合青年団（1969, p. 8） 【黄金三ツ星】 菊（n.d., p. 4）【黄金三つ星】 菊（1985a）【黄金三つ星】

つ星の記述を整理してきた。表1および表2の通り、既往文献における星の記述は一樣でなく、著者によって訓読やその対象が異なっていることが明らかとなった。また川村(1984, p. 143)を除けば、プレアデス星団や三つ星を、役星として用いていたとの記述は管見できなかった。しかし著者らが行った調査では、彼/彼女らの生活の中で、星が多分に活用されていたとの語りを多く聴取できた。

次章では、星名およびその対象に関する語りは勿論のことながら、プレアデス星団と三つ星が役星として用いられていたとの語りも、同時に見ていくこととする。

### Ⅲ. 与論島における星名伝承および生活との関わり

著者らは、2020年6月19日から6月25日、ならびに7月20日から7月21日までの計9日間、20組24名の話者から、与論島における星文化の聴き取り調査を実施した<sup>7)</sup>。本章では、調査で得られた聴き取りを、プレアデス星団と三つ星の2つの星に絞って見ていくこととする。なお本稿では、話者本人からの書面による了承を得た上で、話者の姓名、出生地、生年を記載している。

#### 1. プレアデス星団

本調査で得られた当該星名は、「プリブシ」と「ムリブシ」の2つで、それが指しているものは「プレアデス星団」と「全天の星」の2種であった。またこれらが、生活の上で必要不可欠なものであったとの語りを多数聴取できた。ここではまず、プリブシをプレアデス星団と同定する語りから見ていきたい。

麦屋東区出身の久留森清さん(昭和12年生)は、プリブシの特徴を鮮明に語ってくれた(2020年6月25日の聴き取りに依る)。

プリブシも出るよ、東から。プリブシは、固まって10個くらいじゃないかな。あれが上がってきたら、もう昼になるちゅうるって言って。それが上がってきたら、もう夜明けになると。それを計算しとった。今も上がってくるかな。あれが上がってきたら、スミイカが釣れるちゅうて。それから、7月、8月、9月くらいまではイカが釣れるって。

久留さんによると、プリブシとは、10個くらいに固まった星で、6月の明け方に上ってくるという。与論島では、6月初旬の明け方からプレアデスが見え始めるため、久留さんの言うプリブシは、明らかにプレアデス星団である。また、夜明けを知らせてくれる星であったという語りや、プリブシが上ってくる時節とスミイカ(アオリイカ)の旬が符合しているという語りから、これが、時間や時期を知らせてくれる役星であったことが読み取れる。久留さんは、このプリブシを見ながら、時間や当該時節における獲物の如何を推察していたのであろう。

麦屋東区出身の福永春重さん(昭和13年生)は、プリブシの特徴について、次のように語ってくれた(2020年6月24日の聴き取りに依る)。

プリブシはよ、こうちよこちよこつと10個くらい固まって、たくさん小さく出るんですよ。その星のことを、プリブシと言うんだね。大体、時間の目当てになるんですよ。このプリブシがここに出たら、何時頃だねとかつて。東側から出て、だんだん西側に傾いていくんですよ。夜明けとともに西の方に行くんですよ。

福永さんによると、プリブシとは、東の空から上ってくる、10個くらいの小さな星が固まったものだという。プリブシが見られる時節は分からないものの、その特徴からして、プレアデス星団に同定して良いと思う。また久留さん同様、プリブシが時間を知るための役星であったことを語ってくれた。

古里出身の川畑武雄さん(昭和15年生)も、プリブシについて語ってくれた(2020年6月25日の聴き取りに依る)。川畑さんによると、プリブシとは、早朝3時から4時ごろ、東の空に上ってくる、5つの固まった星のことだという。プレアデス星団に相違ない。また川畑さんによると、夜半イカ釣りをする際、方角を知るための星として、このプリブシを重宝していたという。時間や時期だけでなく、方角を知るための役星としても、プリブシが活用されていたのである。

古里出身の原田村元さん(昭和9年生)は、プリブシについて、興味深い語りをしてくれた(2020年6月22日の聴き取りに依る)。

夕方の暗くなる時に出るのは、西の方にユネーブシ(宵の明星)ちゅて、大きいやつが西の方にあるんですけど、あれが沈む時から、イカが食い始めるんですよ。昼の内は分からんけど、ちょっと暗くなり始めたら見えるわけ。プリブシは、今頃は大体、12時くらいから出て。その大きな星(プリブシ)が出る時に、イカも魚もサメもカジキも、よく来て食うもんだから。出なくてもボツボツは食うけど、その星が出る時には、ジャンジャン食うわけ。そんな時はもう、一生懸命やらんといかんくらいに。プリブシは8(個)くらいあるかな。(形は)もう、足みてい。

原田さんによると、プリブシとは、6月終りの12時ごろに上ってくる星で<sup>8)</sup>、8個くらいに固まった、人間の足を象った星だという。かかる特徴に鑑みれば、原田さんの言うプリブシは、明らかにプレアデス星団である。

原田さんによると、プリブシが出始めた時分に、イカや魚の食いつきが非常に良くなるという。「ジャンジャン」という表現や、「一生懸命やらんといかんくらい」という語りから、その食いつきの良さが看取できよう。すなわち原田さんは、星の出と魚の騒ぎとを結び付けて、夜漁に出ていたのである(cf., 北尾, 2000c)。

プレアデスの出によってイカや魚の食いつきが良くなるという聴き取りは、五島列島や隠岐、能登半島など、内地の一部では存するものだが(北尾, 2018, pp. 34-45)、奄美・沖縄地域におけるそれは、既往の文献では見当たらないものである。原田さんによると、星の出をもとにした漁法は、明治35

年生まれの父親から教えてもらったことだという。

これは僕が研究したわけじゃなくて、僕の親父が、糸満の昔の漁師連中から聞いて、研究してきて、それで僕に教えたわけよ。それでいつも星を見たりしてやっとなんですよ。もう今頃の若い連中は、そんなことしないでしょ。GPSを持っておるし。僕はGPSが出ない、昔のあれだから。

原田さんの父親は、糸満での漁撈奉公、俗に言う「糸満売り」の経験者である。「糸満売り」とは、各地網元からの前借金を抵当に、10代の少年少女が、漁業中心の年季奉公に出された沖縄特有の雇用制度のことで、ヤンバルなどの農村地域や、伊是名島などの離島の若者が、多くこの労働に従事していたとされている(福地, 1983, pp. 13-14)。

奄美群島においても、かなりの人数の若者がこの漁撈奉公に与したとされており(cf., 谷川, 1981)、殊に与論島では、大正末期から、糸満人によるマーラン船の来航が増加したという(榮, 1964, p. 84)。与論島における「糸満売り」の大半は、若者本人が志願して雇われて行ったとされるが<sup>9)</sup>、そこでの生活があまりに過酷であったことから、分別のない子どもたちに対して、「イチュマン・カティ・ウユン・ドー(糸満に売るぞ)」と脅かす親が多かったことが報ぜられている(菊, 1985b, pp. 58-59)。原田さんの星の出と魚の騒ぎを結び付けた漁法は、彼の父親が糸満奉公で学んだことに基づいていたのである。

なお、昭和11年生の山下金吉さん(麦屋東区出身)も、星の出と魚の騒ぎを結び付ける語りをしてくれたが、「食うことは食う」という程度で、原田さんのように「ジャンジャン食う」という語りではなかった(2020年6月22日の聴き取りに依る)。いずれにせよ、与論島で星の出と魚の騒ぎを結び付けた語りがあったことは、瞠目すべきものであろう。

翻って、「ブリブシ」が「全天の星」を指すという語りもあった。古里出身の上野テツさん(大正15年生)は、次のような語りをしてくれた(2020年6月23日の聴き取りに依る)。

固まった7つか8つぐらの星があるでしょ、あれをブリブシと言ったり。それから、天に全部ある星を総まとめにしてブリブシと言ったり。それもその地区、その人その人によって、一定には決まっていなかったです。でも、わりとブリブシっていうのは、スバルのことですよ。それで歌にあるティンヌブリブシっていうのは、相対的にたくさん星があるってことだけだ。

上野さんによると、概してブリブシとは、「固まった7つか8つぐらの星」、すなわちプレアデス星団のことを意味していたという。しかし地区によっては、ブリブシを「全天の星」として理解する人もいたという。また、民謡歌詞(→IV章参照)にある「ティンヌブリブシ」は、「相対的にたくさん星がある」こと、すなわち「全天の星」を指していると語ってくれた。

那間出身の竹下徹さん(昭和11年生)も、上野さんと同様の語りをしてくれた(2020年6月20日の聴き取りに依る)。

ブリブシというのは、7つ星か5つ星か、プレアデス星団というのがありますよね。あれがブリブシだから。(ただ、ティンヌブリブシヤ)ユミバユマリシガという民謡は、ブリブシ(プレアデス星団)のことじゃなくて、全天に散らばっている星のことです。全天の星の数は、数えることは可能だけど、親の教えというのは数限りないという意味の教訓歌です。

竹下さんも、ブリブシをプレアデス星団に同定する語りをしてくれたが、民謡歌詞(→IV章参照)における「ティンヌブリブシ」は、「全天の星」を意味すると語ってくれた。

上野さんや竹下さんの語りより、日常生活におけるブリブシはプレアデス星団を指すが、民謡歌詞におけるそれ、とりわけ接頭に「ティンヌ」が付されれば、「全天の星」を意味するのではないかと思われる。いずれにせよ、このブリブシには、「プレアデス星団」と「全天の星」の2種の意味が包含されていることが看取できた。天文民俗学の文脈では、野尻(1973, p. 184)を中心に、「群れ星」とプレアデス星団を無批判に結び付けるきらいがあったが、近年の研究で、必ずしも両者が結実するとは限らないことが指摘されている。例えば国頭村における調査では、ブリブシを天の川とする語りが聴取されている(北尾, 2020, p. 35)。与論島における本調査の結果も、同種の事例として把握すべきであろう。今後は、他の奄美群島における「群れ星」が真にプレアデス星団を意味しているかを、再検討する必要があるものと思料する。

なお、プレアデス星団の星名を「ムリブシ」とする語りもあった。那間出身の池田直峯さん(昭和27年生)は、次の語りをしてくれた(2020年6月20日の聴き取りに依る)。

私がばあさんから聞いたのはムリブシ。ムリは群れることですよ。でも楽譜には、ブリブシと書いてある。ムリの方が、ブリよりは北に近いですよ。要するに、共通語に近いです。ムリブシはスバル星団ですよ。

池田さんは、祖母(明治32年生)から聞いた話として、プレアデス星団の星名が「ムリブシ」であると語ってくれた。池田さんによると、与論民謡の歌詞では「ブリブシ」となっているが、与論島における本来の語形は「ムリブシ」であるという。そして、「ブリブシ」に比して、この「ムリブシ」の方が、より共通語に近い印象であると語ってくれた。ブリブシ、ムリブシのいずれが正しいのかということよりも、島の中で、その呼称が多様であるという事実は、刮目に値する。

終りに、昭和42年生まれの高橋幸作さん(麦屋東区出身)の語りを見ておきたい。高橋さんは、大正14年生まれ父親から聞いた話として、梅雨明けし、空が青く澄み渡り、入道雲が見え始めた時節の午前3時ごろに、東の空に上ってくる星がブリブシだと語ってくれた。そして、このブリブシが上り始めた時分から、「ヨアケイカ(アカイカ)」がよく獲れたという。星の出と魚の騒ぎを関連付ける語りは、上で見た原田村元さんの語りと符合する。

高橋さんは、星を用いた漁りの経験がないことから、一部、

事実と異なる語りがあった。しかし、ここで注目すべきは、昭和40年代生まれの話者においても、星文化に関する伝承を聴取できたということである。内田武志（1973, p. 2）や桑原昭二（1963, p. 8）は、1900年代から1910年代生まれの話者が、もはや星文化に関する知識を有していないとしているが（cf. 北尾, 2000d）、本調査より、戦後生まれの話者らにも、部分的ではあるが、星文化が受け継がれていることが確認できた。令和時代から天文民俗学の調査を始めた筆頭著者にとって、大変に勇気づけられる語りを聴取することができた。

## 2. オリオン座三つ星

本調査で得られた当該星名は、「フガニミチブシ」、「ミチブシ」、「クガニミチブシ」、「ミーチブシ」<sup>10</sup>の4つで、それが指しているものは「三つ星」と「導く星」の2種であった。また、プレアデス星団と同様、三つ星が、彼／彼女らの生活環境に根付いたものであったとの語りを多数聴取できた。

上野テツさん（大正15年生／古里出身）は、フガニミチブシについて、次の語りをしてくれた（2020年6月23日の聴き取りに依る）。

フガニミチブシっていう、遅くなってから星がこう三つ並んで出るんですよね。フガニミチブシヤ、ワーウイドウテラスというのは、自分のことだけを照らすっていう意味にもなるし、それから彼氏のことにもなるし、一緒に二人で見たっていう意味にもなるし、そのまた彼がいつも自分のことを見ている、守ってくれているっていう意味にも取れるし、色々な意味に分かれてるんですよ。「フガニ」っていうのは黄金という意味ね。だから、黄金ミチブシって特に付けたようなんです。 「ミチ」っていうのは、数字の3のことです。

上野さんによると、フガニミチブシとは、夜半に3つ並んで上ってくる星のことであるという。フガニは「黄金」のことを、ミチは「3つ（ミーチ）」のことをそれぞれ指すと語ってくれた。

ここで注目したいのは、「フガニミチブシヤワーウイドウテラス」の民謡歌詞（→IV章参照）の解釈である。上野さんによると、このフガニミチブシに関する民謡は、その謳う文脈に応じて意味が多様化するという。恋人同士でいる時、この星は相手を照らしてくれるという意味になるが、1人で空を見上げている時は自分のことを照らしているという意味になるという。上野さんは、このフガニミチブシが、自らの寂寥感を慰めてくれる星であったと語ってくれた。

（フガニミチブシが）一種の自分の寂しさ、寂寥感を慰めてくれるっていうかな。天にはいっぱい星があるけど、ミチブシは自分を守ってくれるって思い込んでる場合もあるし、自分にはやっぱりフガニミチブシが指してくれているんだなって思う時もある。

上野さんの言うフガニミチブシを精確に同定できないが、「天にはいっぱい星があるけど」という語りより、全天の星の中でも、このフガニミチブシが特に目立っていたことが理解できる。筆

頭著者にとって、上野さんが、涙を浮かべながらこのフガニミチブシについて語ってくれたことが、非常に印象的であった。

なお上野さんの他に、市村元登さん（昭和8年生／朝戸出身）と大山文子さん（昭和11年生／立長出身）も、フガニミチブシについての語りをしてくれたが、「3つ並んだ星」という特徴のみしか聴取できなかったため、これがどの星を指しているかは判然としなかった。

次に、ミチブシに関する語りを見ていきたい。原田村元さん（昭和9年生／古里出身）は、ミチブシについて、とみに明瞭な語りをしてくれた（2020年6月22日の聴き取りに依る）。

（プリブシが出た後）2時間くらいしてから、また東の方からミチブシが出ます。プリブシがこのぐらいの時（図3参照）に、ミチブシが出てきます。これが出る時は、誰が見ても、それはもうはっきりします。ミチブシは真っすぐ下からじゃなくて、（右手でプリブシの右下辺りを指しながら）この辺から出てきます。ミチブシはこう縦に並んで、ちょっと歪んでます。（三星の右側を指しながら）ミチブシはここにも、もう一つ小さいのがあるけどね。小さいのはあるけど、当てにしてないです。本当はフガニミチブシまで言わんといかんけど、こっちはもう、ミチブシ、ミチブシって言うんです。与論ではね、フガニミチブシって、あんまり言わんですよ。フガニミチブシとか、それはもう昔の人が言ったあれじゃないかな。あんまり、クガニミチブシとか、そんなことは言わない。もう、ミチブシ、ミチブシって。

原田さんによると、ミチブシとは、プリブシ（←前節参照）が出た後の2時間後（午前2時ごろか?）に、プリブシの右下辺りから上ってくる、縦に3つ並んだ星のことだという。この語りより、ミチブシが、三つ星を指していることは明らかであり、時間や方角の役星であったことが読み取れる。

原田さんは、プリブシとミチブシの位置関係について、プリブシが30度ぐらいの高さにある時に（図3）、ミチブシが上ってくると語ってくれた。実際の見え方は、プレアデス星団が高



図3：ミチブシとプリブシの位置関係について語る原田村元さん（右）と本調査の案内を頂いた麓才良さん（左）  
原田さんの指す角度から思案するに、プリブシが高度30度ぐらいになった時分に、ミチブシが上がってくるということが読み取れる。

度 35 度くらいの時に三つ星が見え始めるため、この語りも非常に正確であることが分かる。

また原田さんは、ミチブシが上ってくる時分、その右横に小さな星が1つあると語ってくれた。三つ星の周辺は多数の星が存しているため、この「小さな星」を同定することはできないが、三つ星の周辺まで精緻に観察していたということは看取できた。

ここで、当該星名の呼称について少し見ておきたい。原田さんは、当該星名について、本来は「フガニ（クガニ）ミチブシ」だが、生活の上では、「ミチブシ」と呼んでいると語ってくれた。北尾（2020, p. 36）は、漁師が漁撈に出ている時、便宜的に本来の星名を短縮して呼ぶ傾向があることを指摘しているが、これは原田さんの語りにも当て嵌まる。つまり、フガニミチブシという長い星名で呼ぶのではなく、短縮形の「ミチブシ」が生活の中では使われていたのである。

当該星名をミチブシと呼んでいた話者は、他に、山下金吉さん（昭和 11 年生／麦屋東区出身）、福永春重さん（昭和 13 年生／麦屋東区出身）、川畑武雄さん（昭和 15 年生／古里出身）がいたが、いずれも、海人として星を目当てに仕事をしていた人たちである。

山下金吉さんは、当該星名について、「本当はフガニミチブシだが、ミチブシと省略して呼んでいた」という語りをしてくれた。福永春重さんは、「フガニミチブシという人もあったかもしれないが、自分はミチブシと呼んでいた」と語ってくれた。したがって「フガニミチブシ」という呼称は、あくまでも民謡の歌詞の中だけであって、生活の上では「ミチブシ」とするのが自然であったものと思料する。

麦屋東区出身の菊千代さん（昭和 2 年生）も、三つ星が役星であったとの語りをしてくれた（2020 年 6 月 20 日の聴き取りに依る）。

ミチブシは、3つの星がこう縦に並んでる。時計のなかった頃、青年が若い娘の家に三味線を持って遊びに来る、夜遊びという若い男女の遊びが 11 時くらいまで（あって）。夕食の済んでから遊ぶと。そんな習慣があったけど、時計の無い時代だから、どの星がどのくらいになったら切り上げると。11 時頃までには夜遊びは終わる。時計のない時代だから、冬だったらミチブシがどのくらいの高さまで上がったなら、11 時頃ならどのくらいまで上がったかということで、星の高さで時間を決めていたんだよね、あの頃は。菊さんは、冬に見られる、縦に 3 つ並んだ星がミチブシであると語ってくれた。恐らく、三つ星のことだろう。ここで注目すべきは、与論島の人々が、時間の目安として、このミチブシを用いていたということである。菊さんによると、かつて盛んになされていた「夜遊び」の切り上げ時刻は、ミチブシの高度をもとに決めていたという。無論、ミチブシは、時節とともにその高度が高くなる。したがって、ミチブシを当てに時間を読み取るというのは、あくまでも大体の目安にしかならなかっただろう。

ただ菊さんの語りより、ミチブシが与論島の人々の生活に密接に結び付いたものであったことが理解できる。

翻って、ミチブシを「導く星」とする語りも聴取できた。竹下徹さん（昭和 11 年生／那間出身）は、ミチブシについて、次のような語りをしてくれた（2020 年 6 月 20 日の聴き取りに依る）。

このフガニミチブシというのは、私の解釈では三つ星ということではなくて、導く星という意味に使ってると思うんですけどね。ミチブシは 3 つという意味ではなくて、導くと。2 つも、3 つもあるということではないと思いますよ。

竹下さんによると、フガニミチブシの「ミチ」には「導く」という含意があり、三つ星のことではないと語ってくれた。この語りは、栄（1950, p. 46; 1964, p. 113）の「黄金道星」の記述と符合する（←Ⅱ章 2 節参照）。竹下さんの言うフガニミチブシを精確に同定できないが、これが「導く星」であったという語りより、特に目立つ星であったことは相違ないだろう。同じ島の中でも、「三つ星」とする語りと、「導く星」とする語りの 2 種あることは刮目に値する。

終りに、茶花出身の喜山康三さん（昭和 25 年生）の語りを見ておきたい。喜山さんによると、ミチブシに対する接頭語は「クガニ」であり、「フガニ」では通じにくいという。また喜山さんは、「クガニミチブシの真ん中に流れ星が入り込むと、不吉なことが起きる」という話を、父親（明治 45 年生）から聞いたと語ってくれた。かかる喜山さんの話は、非常にローカルなものであると思料するが、ミチブシと流れ星を重ね合わせた語りは、興味をそそるものがある。事実、与論島では、流れ星（ナガリブシ）を「死者の魂」と見立て、「その星の落ちる方向から死者が出ると恐れられていた」という（菊・高橋, 2005, p. 376）。喜山さんの語りを聴きながら、オリオン座流星群ないしふたご座流星群の極大日に、夜空を見上げていたのではないかなどと邪推してしまったものである。

#### IV. 与論島における「星の俚謡」

古来より日本人は、民謡（俚謡）の中で、星に関する歌を唄ってきた。その歌詞には、独自の星名や星の特徴、動きなどが盛り込まれており、その地域の文化を色濃く反映したものとなっていた。すなわち人々は、音楽という芸術活動を通じて、星文化を受け継いできたのである。北尾は、かかる星文化を唄った民謡を、特に「星の俚謡」と名付けている（大阪市立科学館, 2020）。

与論島においても、この「星の俚謡」が多数存している。もとい奄美群島は、近世まで全国的に行われていた「歌遊び」が近年まで盛んになされていた、言わば民謡が生活化された地域である（小川, 1980）。与論島も、その例に漏れず、かつては「民謡を知らぬ者は一人もいない」ほど、民謡が身近なものとして認識されていたほか（栄, 1950, p. 22）、戦前期までは、若い男女が三味線伴奏で恋歌などを歌って楽しむ「夜



遊び」が、盛んに行われていた（山田，1984，pp. 77-78）。かかる点に鑑みると、与論島で「星の俚謡」が多数存しているのは、至極妥当なものであるといえよう<sup>11)</sup>。

既往文献で管見できた「星の俚謡」の歌詞は、表3の通りである。基本的にこれらの歌詞は、「純粹の輿論民謡と思はるもの」として紹介されているが（野村，1936，p. 170）、唯一、No. 14は、琉歌『ていんさぐぬ花』の歌詞として紹介されている（川村，1984，p. 663）。概して奄美群島の文化は、「琉六薩四」と言われ、琉球文化に負うところが多いことは周知の通りだが（久保，1971，p. 69）、沖永良部島（「エラブ風」）と与論島（「ヨロン風」）の民謡は、とりわけ琉球の影響が強いとされている（仲宗根，1979，p. 128）。ゆえに、「ヨロン風／琉歌」の線引きをして民謡歌詞の議論をすることは、文化の構築主義的立場からすれば有用でないものと思料するが、敢えて言うならば、No. 14の歌詞は、近年になって与論島に流入してきたものだろう<sup>12)</sup>。

本調査で蒐集できた民謡歌詞は、No. 10、No. 11、No. 14の3種類であった<sup>13)</sup>。No. 10について、立長出身の大山文子さん（昭和11年生）は、「ティンヌブリブシヤ ミナグイドウティユルー ヤレミナグイドウティユルー フガニミチブシヤワーウイドウヨーティユル ヤレワーウイドウヨーティユル」と唄ってくれた。大山さんによると、この歌詞は、「6個ぐらいに固まっ

た星は皆の上を照らし、平均間隔が同じ3つの星は私の上を照らす」という意味だという。なお、このブリブシは、目の良い人なら12個くらい見えると語ってくれた（2020年6月23日の聴き取りに依る）。恐らく、プレアデス星団のことだろう。

当該歌詞で興味深いのは、喜界島でも同様の聴取があるということである<sup>14)</sup>。北尾（1984，p. 110）は、喜界島手久津久の森元実さんから聴取した俚謡として、「天ぬブリムン（群れ星）や、ユス（他人）ぬ上づ照るり、クカネ（黄金）ミツブシヤ吾が上ば照るり」を挙げている。歌詞は大きく異なるにせよ、その意味するところはほぼ同じである。与論島と喜界島の文化が類似しているとの語りは、上野テツさん（大正15年生／古里出身）や阿多健夫さん（昭和3年生／那間出身）から聴取できた。民謡の文化圏では異なるはずの与論島と喜界島で（cf. 仲宗根，1979，p. 128）、ここまで類似した民謡歌詞が残っている点は興味をそそるものがある。

No. 11と類似したものとして、上野テツさん（大正15年生／古里出身）は、「ティンヌブリブシヤ ユミボユミバテラリユーシガウヤヌシグトウヤ ワシリナランヌ」という歌詞について語ってくれた。上野さんによると、この歌詞は、「たくさんの星は数えたら数え切れるけど、行儀見習いや昔からの言い伝えなどの親の教えや、親の慈愛は忘れない、数えきれない程、親の教えや愛情がある」という意味だという（2020年6月23日の

表3: 管見できた「星の俚謡」の民謡歌詞一覧（著者によって歌詞に若干の差異がある）

No.	民謡歌詞（五十音順）
1	クガニミイ ブシ マンナラ テイ ワアチヤ ユヨオ アス 黄金三チ星や真並デイ照ユイ デエ我達ウチ寄合ティ 遊ビシユビユラン（山田，1980a，p. 112）
2	チミカブ カブ イ チミ カブ ウティン シチヤ ミイマム 罪 被り被り 言チヤンチン罪ヌ被ラリユミ 御 天ヌ下エクトウ 見守イガシユラ（山田，1980a，p. 112）
3	ティン アマ コオ ミシ ベエ ユル ア シダイ イイ アガリ 天ヌ天ヌ川や 北トウ南トウ立テユイ 夜ヌ明キ次第 西トウ東（山田，1980a，p. 112）
4	ティン ブシ ユ ユ パ ウヤ グワン ユ 天ぬ星えりば 数みば数み果てイゆい 親がなし御恩や 数みやならじ（川村，1984，p. 143）
5	ティン ブシダマ ユ ユ パ ソウダン パ ネエ 天ヌ星溜り 算ミバ算ミ果テユン サトウガシユル 相談ヤ 果ティヤ無ラヌ（山田，1980a，p. 112）
6	しかに 天ぬ群星や みやが上ど照らす 黄金明星や 吾上ど照らす（栄，1950，p. 25）
7	ぶりぶし ゆみ ゆみばて ぼ 天ぬ群星や 数ば数尽ゆい（果てゆい） 里がする相談や 果てや無さみ（栄，1950，p. 113）
8	ティン ム ブシ ア ユヨオ テイ ワアチヤ ユヨオ アス 天ヌ群リ星ヤ 彼ニ寄合ティ照ユル デイ我達ウチ寄合ティ 遊ビシヤビユラン（山田，1980a，p. 112）
9	ティン ム ブシ カ ア ワアチヤ スル ウタ ア 天ヌ群リ星ヤ 彼ニ明カサ有ユル 我達ガウチ揃イ 歌イ明カサン（山田，1980a，p. 112）
10	ティン ム ブシ ミナ ウイ テイ クガニミイ ブシ ワアウイ テイ 天ヌ群リ星ヤ 皆ガ上ドウ照ユル 黄金三チ星ヤ 我上ドウ照ユル（山田，1980a，p. 112）
11	ティン ム ブシ ユ ユ ユ ウヤ グワン ユ 天ヌ群リ星ヤ 算ミバ算ユマリユシガ 親ガナシ御恩ヤ 算ミヤ成ラヌ（山田，1980a，p. 112）
12	ネエ カタ ブシ パ フニ ミイア ワアミイア カナ ナ グワ 子ヌ方ヌ星ヤ 走イ舟ヌ見当ティ 我見当ティドウ成ユル 愛シ産シ子（山田，1980a，p. 112）
13	ニヤマシ ク テイ テイ ヲウガ ヤジャヌマサブルガ 今 死チヤンチン巧ク テウライ 天チ星成トウティ 照ラバ拜ミ（山田，1980a，p. 112）
14	ユル 走 フニ ニ ホブシミア ワ ウヤ ワ 夜走やす船や 子ぬ方星見当て 我ん産ちやる親や 我んどウ目当てイ（川村，1984，p. 663）
15	ワア ム ドウシ ティン ブシクル ヲウガ 我が思ユル友人ヤ 天ヌ星 心 拜マリユシエエシガ 自由ヤ成ラジ（山田，1980a，p. 112）
16	めらび おが 我が思る女童 天ぬ星心 拜まりゆしえしが 自由やならじ（原田，1982，p. 67）

聴き取りに依る)。No. 11の歌詞とは若干異なるが、その含意はほぼ同じである。このように与論島の人々は、地区や唄う人によって、また唄う環境によって、その歌詞を少しずつ変えていたものと思われる。

No. 14の歌詞について、朝戸出身の市村元登さん(昭和8年生)は、三線に合わせて、「ユルハーヤスフニーヤ ニヌファブシガタヨリー (ミアティー) ワンナチャルウーヤ ヤサヨワズドゥーミアティワズドゥーミアティ」という歌を唄ってくれた(採譜1)。市村さんによると、この歌詞は、「夜走ら

す船は、ニヌファブシが目当て、俺を産んだ親は、俺を目当て」という意味だという。また市村さんは、この「ニヌファブシ」が北極星であり、夜漁の時には、このニヌファブシと潮の流れを計算して、自らの位置を把握していたと語ってくれた(2020年6月20日の聴き取りに依る)。

市村さんの歌で興味深いのは、歌詞は『ティンサグヌ花』のそれとほぼ同じであるにも拘わらず、メロディーラインが全く異なるということである。したがってNo. 14が、本質的には琉球の歌詞であったかもしれないが、与論島の人々は、それを

採譜1: 市村さんが唄ってくれたメロディー(採譜: 米山龍介)

三線

唄

(.) ユルハ ーラスフニーヤ ニヌファブシ ハ(タ)ヨニーニ (ミ)アラーツー

三線

唄

(ニ) ワ ン ナチャル ウーヤヤ(サヤサ) ニヌファブ シヤ(サヤサ) ワヌドゥミアー フ カ'' ニミチ ブーシヤ(サヤサ) ワツドゥウミラー

三線

※(サヤサ)は合の手

唄

ティ ワヌドゥミアー ティー (2.) ティンヌー ス アツドゥウティユ ル

三線

hit.

自らの文化に吸収することを通して、独自のアレンジを加えていたことが理解できる。

次に、蒐集したメロディーを採譜したものが、採譜1、採譜2、採譜3、採譜4である<sup>15)</sup>。本調査では、4種類のメロディーを蒐集できたが、その内の2種類は「調音不能」、すなわち五線に記すことが困難であった。譜面2、譜面3、譜面4は、『ティンサグヌ花』のメロディーと符合した。市村元登さん（昭和8年生／朝戸出身）が唄ってくれたメロディー（譜面1）は、『里があでく節』の「音の流れ」と「フレーズ」が類似していたが（日本放送協会，1972，pp. 705-706）、断定することはできない。また、「調音不能」であった福永春重さん（昭和13年生／麦屋東区出身）が唄ってくれたメロディーは、松原（1974，p. 84）が採譜した『下ゲイキントウ』の音型（「音の流れ」と類似していることが明らかになったが、大山文子

さん（昭和11年生／立長出身）が唄ってくれたメロディーは、既往文献を照合する限り、該当するものがなかった。本来であれば、より深く音楽的考察をすべきものと思料するが、本稿の趣旨を逸するため、これ以上立ち入っての議論は控えることとしたい。いずれにせよ、歌詞・メロディーともに、その場の環境および状況に応じて、柔軟に唄い替えていることが読み取れた。

### V. 結びにかえて一星文化の観光活用に向けて

本稿では、与論島における星名伝承、およびその生活環境での活用に関する聴き取りを、とりわけブレアデス星団と三つ星に焦点を絞って議論してきた。本稿の新規性は、生活環境における星の活用に関する語りを多く聴取できた点に収斂される。II章で見た通り、既往の文献では、星名やその対象に

採譜2: 菊さんが唄ってくれたメロディー（採譜：米山龍介）

ユルハ ラース フニ ヤ ニヌ フアシー ミー アティ  
 ティンヌ ブーリ フー シヤ ミナカウルー テー ユル

ワンナ チャール ヨー ヤ ヤ ウンドミーア テー  
 フガニ ミーチ フー シヤ ワウドゥティーユ ル

採譜3: 上野さんと竹下さんが唄ってくれたメロディー（採譜：米山龍介）

(上野さん) ティンヌ ブーリ フー シヤ ミナカウルー ティ (シ) (ス)  
 (竹下さん) ユルハ ラース フニ ヤ ニヌ フア (フ) (ヤ) ティ

フガニ ミーチ フー シヤ ワウドゥ (シ) (ス)  
 ワンナ チャール ヨー ヤ ヤ ウンドミーア テー

○印：その方に聴こえました。

採譜4: 採譜2と採譜3を転調したメロディー（採譜：米山龍介）

ユルハ ラース フニ ヤ ニヌ フア シー ミー アティ  
 ティンヌ ブーリ フー シヤ ミナカウルー テー ユル

ワンナ チャール ヨー ヤ ヤ ウンドミーア テー  
 フガニ ミーチ フー シヤ ワウドゥティーユ ル

関する記述は多く見られたが、それを役星として扱った文献は少なかった。しかし本調査では、与論島の人々が、生活環境の中で星を多分に活用していたことが看取できた。1970年代に観光ブームを経験したにも拘わらず、これほど多くの星文化が残っていることは、瞠目すべきことであろう。

またⅢ章で見た通り、与論島の中でも、話者によって、星名およびその対象は一様でなく、若干の差異が見受けられた。同じ地域であっても、話者によってその解釈が異なるということは、往々にしてあることである。著者らは、かかる差異を多様性と把握し、この多様な解釈をいかに伝承していくかを検討することが肝要であると考えている (cf., 北尾, 2000b, p. 11)。したがって本稿でも、紙幅が許す限り、多くの話者の語りを取り入れてきた。しかし、全ての話者の語りを盛り込むことができなかったことも、また事実である。紙面を借りて、お詫びしたい。

本調査の中では、プレアデス星団と三つ星の他に、北極星や北斗七星、金星、流れ星、彗星に関する星文化を聴取できた。また与論島は、旧暦文化が残る島であるため、月にまつわる文化も聴取できた。これらについては、稿を改めて発表することとしたい。

加えて本調査では、麦屋東区を中心に、漁撈に関係する話者から聴き取りを行ったが、農業に因んだ星の活用についても、今後聴取できる可能性がある。現に、沖永良部島では、「ブリフシ (プレアデス星団)」と「ミツブシ (三つ星)」が登場する物語があるが、そこでは、「麦蒔き」と「田植」に関する記述が並行してなされている (岩倉, 1940, pp. 222-223)。与論島が稲作に不向きな土壌質であるにせよ、半農半漁の生活を送ってきたことは事実であるため (与論町誌編集委員会, 1988)、農作に因んだ星文化が存する可能性は十分にあり。今後は、農業に関する星文化の蒐集も視野に入れながら、調査を継続する必要があるだろう。

終りに、かかる星文化の観光活用に関する若干の私見を書きつけておく。周知の通り、観光研究のコンテキストでは、「文化の商品化」、「文化の流用」、「文化の真正性」、「観光文化」などの見地から、とりわけ文化人類学者を中心に、観光の中に文化を取り入れることに対する批判的な議論が展開されてきた (cf., 橋本, 1999)。無論、過度な観光のパフォーマンスによって文化が破壊される可能性は十分あるし、地域性の希薄化に結び付く場合もあるだろう。しかし本調査において、与論島内で星文化の継承が十全になされていないことが看取されたのも事実である。理科教育の普及によって、「プレアデス星団」や「オリオン座」など、西洋星座で応答する話者が非常に多かったのである。かかる現状であるならば、観光を通じた文化継承のあり方を模索することも、一考であるのではなからうか。観光事業者が、かかる民俗学的調査に基づく星文化をガイドすることによって、観光を通じた文化継承が可能になるのではないかと考える (澤田ほか, 2021)。

アストロツーリズムのコンテキストにおける、文化活用のあり

方に関する研究も必至であることを申し添え、本稿の結びとしたい。

## 謝辞

本稿執筆に当たって、与論島の皆様から厚いご支援を賜った。本調査の案内を頂いた麓才良さまと竹盛雀さまには、話者の皆様とのスケジュール調整をはじめ、方言に不慣れな著者らの会話の交通整理を頂いた。与論町役場商工観光課の皆様には、本調査の全体的なご支援を賜った。とりわけ麓誘市郎さまからは、多大なるご協力を賜った。また、与論町立図書館の菅原実さまには、同図書館における資料研究のご支援を賜った。関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。そして何よりも、不躰なお願ひにも関わらず、貴重な語りを頂いた24名の話者の皆様に、深く感謝申し上げます。なお、本稿の骨子は、2021年3月14日にゆんぬ体験館で実施された「星空ツーリズム推進事業報告会」、および日本天文教育普及研究会2021年近畿支部会で発表したものである。

## 注

- 1) 深見 (2020; 2021) は、与論島観光とCOVID-19、および2020年に実施された「Go Toトラベル」キャンペーンの関係についての研究を発表しているが、かかる論考における現地調査の充分性に、疑義が呈される。当該感染症が同島に及ぼした影響に鑑みれば、裏打ちされた聴き取り調査のもと、慎重な議論が必要であることは言を俟たない。COVID-19以後の与論島観光については稿を改めたいが、かかる問題を取り扱うに当たっては、入念な現地調査のもとでの議論が必至であることを書きつけておきたい。
- 2) なお、菊千代さん (昭和2年生/麦屋東区出身) は、宵の明星は「ユネーブシ」であり、「シカマブシ」とは言わないと語ってくれた (2020年6月20日の聴き取りに依る)。
- 3) 「全天の星」に分類した事由は、「天ぬ群星やゆみばゆまりゆしが親ぬ御恩やゆみんならん」の訳を、「天の星は数えれば数えられませけれども親の御恩は数えきれないものです」と記述していることに依る (菊, n.d., p. 3)。
- 4) 注3と同様 (菊, 1985a)。なお、菊千代の息子菊秀史が、『歌い継ぐ奄美の島唄 (奄美島唄保存伝承事業実行委員会, 2014)』の中で、『与論方言集』における「群星」の訓読をしているが、「ぶれほし」 (同上, p. 56) と「ぶりぶし」 (同上, p. 59) の2つの表記があるため (誤植か?)、当該星名の読みは判然としなかった。
- 5) 麦屋地区にて記録。話者の生年は不明である。また星名の蒐集のみで、「ミツブシ」の伝承は聴き取れなかったという (2021年2月25日の三上見朗氏からのメール回答に依る)。
- 6) ただし、山田は別著 (1980a, p. 112) で、「黄金三チ星や真並テイ照ユイテ我達ウチ寄合テイ遊ビシユピラン」との民謡歌詞 (→IV章表3: No. 1参照) を記載している。「黄金三チ星」が「真並テ」輝いているのであれば、一文字に輝く三つ星として把握することが自然なものである。
- 7) 6月の現地調査は北尾と澤田が、7月の現地調査は澤田が行った。なお、6月の現地調査に際しては、北尾が中心となって聴き取りを行った。また本調査結果の体系的な考察については、北尾 (2021a; 2021b; 2021c) を参照されたい。
- 8) 沖縄県名護市におけるプレアデス星団の見え方は、新暦6月1日に4時45分ごろ、7月1日に2時45分ごろ、8月1日に0時45分ごろ

- に、東天から上ってくる。当時は時計がなく、また標準時との経度差（時刻で約30分）を加味すれば、概ね原田さんの語りと合致する。
- 9) 本調査においても、昭和7年生の大山八十八さん（城出身）が、自身の糸満での漁撈訓練および南洋での漁業体験について語ってくれた（2020年6月23日の聴き取りに依る）。
- 10) ミーチブシの呼称は、唯一、久留森清さん（昭和12年生／麦屋東区出身）から聴き取ることができた。久留さんは、ミーチブシの特徴について、プリブシの後に上ってくる3つ並んだ星のことだと語ってくれた（2021年6月25日の聴き取りに依る）。恐らく、三つ星を指しているものと思われる。
- 11) 奄美群島における島唄研究は、内田るり子、小川学夫、久保けんお、酒井正子、仲宗根幸一、中原ゆかり、松原武実らが多数の論考を発表しているため、詳細はそちらを参照されたい（cf., 小川, 1993）。また概して、与論島における民謡研究は、他島に比して少ないとされるが（仲宗根, 1979, p. 128）、栄（1950）、山田（1980a）、川村（1981; 1984）、町田（1982）、奄美島唄保存伝承事業実行委員会（2014）による著作が存するほか、松原（1991）が、当該研究に関する参考資料一覧を挙げている。与論島における民謡研究の詳細に関しては、彼らの論考に譲るとしたい。
- 12) 池田直峯さん（昭和27年生／那間出身）によると、『ティンサグス花』が与論島で唄われ始めた時期は不明だが、少なからず近年になって作られた沖縄民謡であることは明らかで、自身が子供の頃、明治32年生の祖母が唄っているのを聴いたという（2021年6月21日の聴き取りに依る）。
- 13) No. 10の歌は、上野テツさん（大正15年生／古里出身；採譜3）、菊千代さん（昭和2年／麦屋東区出身；採譜2）、大山八十八さん（昭和7年生／城出身）、市村元登さん（昭和8年／朝戸出身；採譜1）、大山文字子さん（昭和11年／立長出身）、竹下徹さん（昭和11年／那間出身）、福永春重さん（昭和12年／麦屋東区出身）から、No. 11の歌は、上野さんと竹下さんから、No. 14の歌は、菊さん（採譜2）、市村さん、竹下さん（採譜3）から、それぞれ聴取した。
- 14) なお、沖永良部島では、「天ぬプリブシやよその上ち照ゆい、黄金ミツブシや吾上ち照ゆい」の民謡歌詞があることが報ぜられている（野尻, 1976, p. 288）。
- 15) 与論島における民謡の採譜については、松原（1974; 1975）、山田（1980a）、日本放送協会（1992）も併せて参照されたい。

## 参考文献

- 奄美島唄保存伝承事業実行委員会（2014）『歌い継ぐ奄美の島唄—与論島』鹿児島県。
- 岩倉市郎（1940）『沖永良部島昔話』民間伝承の会。
- 内田武志（1973）『星の方言と民俗』岩崎美術社。
- 大阪市立科学館（2020）「中之島科学研究所 第104回コロキウム『星の俚謡（りよう）』」最終閲覧日2021年3月23日：<https://www.sci-museum.jp/event/?y=2019&m=9>
- 小川学夫（1980）「奄美・沖縄の歌垣的世界」『自然と文化』29, 16-23.
- 小川学夫（1981）『奄美の島唄—その世界と系譜』根元書房。
- 小川学夫（1993）「南島における口承文藝〈民謡〉の研究動向」『口承文芸研究』16, 107-112.
- 文英吉（1966）『奄美民謡大観—増補改訂版』文紀雄。
- 川村俊英（1981）『与論民謡』自費出版。
- 川村俊英（1984）『与論島の民謡と民俗』自費出版。
- 神田孝治（2012）『観光空間の生産と地理的想像力』ナカニシヤ出版。
- 神田孝治（2021）「COVID-19時代のツーリズム・モビリティーズと場所—2020年における与論島の状況に注目した一考察」『立命館大学人文科学研究所紀要』125, 49-76.
- 木川剛志（2021年2月21日）「与論町鹿児島県 島民との交流、心温まる」『朝日新聞・和歌山』, 19.
- 菊千代（1985a）『与論方言集』与論民具館。
- 菊千代（1985b）『与論のしまがたり』はる書房。
- 菊千代（n.d.）『与論民謡集』与論民具館。
- 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』武蔵野書院。
- 北尾浩一（1980）「喜界島一星の民俗調査報告」『Stars & Galaxies』19, 1-6.
- 北尾浩一（1984）「喜界島調査行」阿部昭編『星の手帖 '84 冬』110-111, 河出書房新社。
- 北尾浩一（1991）「スバルについての調査報告」『STELLA』1, 41-50.
- 北尾浩一（2000a）「民衆の星のことは、歌」『天文月報』93（7）, 369-374.
- 北尾浩一（2000b）「星物語の多様性—北極星の物語を事例として」『天界』896, 11-14.
- 北尾浩一（2000c）「天文民俗学試論（29）」『天界』903, 540-541.
- 北尾浩一（2000d）「天文民俗学試論（33）」『天界』907, 813-815.
- 北尾浩一（2018）『日本の星名事典』原書房。
- 北尾浩一（2021a）「天文民俗学試論（186）」『天界』1155, 272-274.
- 北尾浩一（2021b）「天文民俗調査報告（2020年）」『大阪市立科学館研究報告』31, 13-16.
- 北尾浩一（2021c）「教育としての天文民俗—異分野としてでなく天文教育の根幹に迫る試み」『天文教育』33（5）, 掲載予定。
- 久保けんお（1971）「奄美民謡概説」『沖縄文化』8（2・3）, 69-78.
- 桑原昭二（1963）『星の和名伝説集—瀬戸内はりの里』六月社。
- 近藤功行（2003）「与論町における死亡場所、死生観と終末行動をめぐる人類生態学的研究」『志学館法学』4, 181-201.
- 栄喜久元（1950）『与論島の民謡と生活』出版社不明。
- 栄喜久元（1964）『奄美大島与論島の民俗』自費出版。
- 澤田幸輝・尾久土正己（2020）「アストロツーリズムを通じた持続可能なまちづくりの取り組み—鹿児島県与論町を事例に」『2020年日本天文教育普及研究会年会』263-266.
- 澤田幸輝・尾久土正己（2021）「国外におけるアストロツーリズム研究の諸論調—国内研究のフレームワーク構築に向けての考察」『観光学』24, 21-40.
- 澤田幸輝・北尾浩一・尾久土正己（2021）「天文教育とアストロツーリズムの垣根を越えて—鹿児島県与論島における星文化普及の取り組み」『天文教育』33（5）, 掲載予定。
- 柴田晋平・稲村陽子・大野寛・佐藤和也・須貝秀夫・鈴木静児・玉虫良明・服部完治（2007）『星空案内人になろう!』技術評論社。
- 谷川健一（1981）『海の群星』集英社。
- 仲宗根幸市（1979）「奄美の歌」『まつり』33, 117-130.
- 南海日日新聞（2021年2月21日）「星空観光推進へ—モデル地区設定し防犯灯改良 与論町」, p. 8.
- 日本放送協会編（1993）『日本民謡大観—奄美諸島篇』日本放送出版協会。
- 野尻抱影（1973）『日本星名辞典』東京堂出版。
- 野尻抱影（1976）『日本の星—星の方言集』中央公論社。
- 野村政尚（1936）『輿論島』自費出版。
- 橋本和也（1999）『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社。
- 町田原長（1982）『与論島の民謡と三味線楽』自費出版。
- 深見聡（2020）「鹿児島県与論島における新型コロナウイルス感染拡大から考える島嶼観光の展望」『日本地理学会発表要旨集』54.
- 深見聡（2021）「与論島での新型コロナ感染拡大から島嶼観光を考える」『地理』66（2）, 24-30.
- 福地曠昭編（1983）『糸満売り—実録・沖縄の人身売買』那覇出版社。
- 星空案内人資格認定制度運営機構（2020）『星空案内人資格認定

- 講座内容要綱』最終閲覧日: 2021年2月20日, [https://sites.google.com/site/hoshizoraannaishikakunintei/for\\_organizations/jiangyi-yao-xiang](https://sites.google.com/site/hoshizoraannaishikakunintei/for_organizations/jiangyi-yao-xiang)
- 星の民俗館 (2021) 「オリオン座の星名」最終閲覧日: 2021年2月25日, <http://www.maroon.dti.ne.jp/starlore/wamei/magyou.html#%EF%BE%90%EF%BE%82%EF%BE%8C%EF%BE%9E%EF%BD%BC>
- 松原武実 (1974) 「与論島民謡《イキントウ》の研究」『南日本文化』7, 79-91.
- 松原武実 (1975) 「与論島民謡《アタイサマダキ》の研究」『鹿児島短期大学研究紀要』15, 101-107.
- 松原武実 (1991) 「与論島の民謡と芸能の資料」『南日本文化』24, 85-94.
- 山田実 (1980a) 『奄美与論島の音楽と習俗と言語』自費出版.
- 山田実 (1980b) 「与論島神話の研究」『沖縄文化』53, 19-40.
- 山田実 (1984) 『与論島の生活と伝承』桜楓社.
- 山田実 (1995) 『与論島語辞典』おうふう.
- 与論町誌編集委員会 (1988) 『与論町誌』与論町教育委員会.
- 与論町連合青年団 (1969) 『成人古歌』出版社不明.

受理日 2021年6月10日